

長期不登校の背景要因に関する研究

—高校における認知特性と内的体験内容の1年間の変化に着目して—

19013FRM 和田 紗季

I. 問題

1. 認知機能の変化

漆畑・加藤（2002）は、学習困難を抱えるLD及びその周辺児童に対して、認知能力の経年変化について検討している。言語性IQと動作性IQの差（ディスクレパンシー）が大きい児童ほど、その改善は難しいことが分かった。また、もともとディスクレパンシーがあまりみられない児童が、逆にディスクレパンシーがみられるようになることはなかったとしている。定期的な個別指導を行うことで、少しずつではあるが、認知機能の上昇がみられることを示唆している。それに伴い、認知能力のアンバランスさも徐々に改善されることを報告している。しかしながら、定期的な個別指導を導入しても、認知能力に変化がみられない児童が存在しており、そのような児童には、どのような特性がみられるのかについては言及されていない。

2. 自己イメージを主とした内的体験内容の特性

花田（2012）は、ASD（自閉スペクトラム症）児の自己イメージの特性は、人間イメージの乏しさと身体感覚の欠如がみられることであると指摘した。ASD児の内的体験内容として、自己の断片化が起きており、それを無理やりくっつけることで人の形を保とうとしているものと考えられる。また、キャラクターへの同一化も挙げられる。一方、AD（愛着障害）児の自己イメージの特性は、自分を他者に対してどう表現するのかという視点の獲得に多様な形の課題があると考えられる。自己内の傷つきに対してどうすることもできない不全感や無力感を抱いていると思われる。また基本的安心感が備わっていないこともその特徴であると思われる。

3. 比較検討の対象とする昨年度の研究概要

石本（2020）は、長期不登校経験を持つ中高生

の心理的課題を次のように整地した。認知機能や特性の分類をもとに内的体験内容を検討した。ウェクスラー式知能検査とSTRAW-Rの結果より、ASD群とAD群である知的ボーダーライン群（知的BL群）、PSI低群、PSI平均・流暢性低群、PSI平均・流暢性高群の5つに分類した。類型化にあたり、処理速度に困難を抱える生徒が半数以上いたため、PSI=89以下をPSI低群、PSI=90以上をPSI平均群に分けた。全体の傾向として、下位検査評価点間の差が大きく認知のアンバランスがみられることが分かった。ASD群における認知特性の特徴として、認知特性のアンバランスさが大きく、学習に対して強く困難さを感じていることが分かった。知的BL群は、知的に同年齢集団との差が大きく、学習場面での傷付きを強く体験しており、劣等感を触発されやすい。PSI低群は、文字の読み書きが遅く、学習への無力感や傷付きを抱えやすいという特徴がある。PSI平均・流暢性低群は、STRAW-RのRANにおいて反応時間がかかっており、自動化に困難があると思われた。PSI平均・流暢性高群は、知的な困難さはないが、情緒的な問題で不登校に至ったと思われる。内的体験内容として、ASD群は花田（2012）同様に、自己が断片化する特徴がみられた。AD群においては、一定の特徴はみられずより個性が高いことを報告している。

II. 目的

これまでの研究では、認知機能において、変化する事例と変化しない事例があることが分かっている。本研究では、その違いについて、自己イメージと内的体験内容を基に検討する。これまでの研究を基に、ASD圏とAD圏の基礎的な認知特性（研究1）と内的体験内容（研究2）の経年変化に焦点を当て、過去データ（石本，2020）との比較検討することを目的とする。

III. 方法

1. 調査協力

(1) 調査協力者

不登校特例校である A 学園に通う中高生 8 名であった。

(2) 調査内容

研究 1：認知特性の検討

ASSQ, ウェクスラー式知能検査, 改訂版読み書きスクリーニング検査(STRAW-R)の実施。

研究 2：内的体験様式の検討

人物画, ロールシャッハテストの実施。

IV. 結果

使用するデータは, 不登校高校生 6 名であった。本研究では, 対象人数が少ないため, 群ではなくタイプと表記した。

1. タイプ分けの変化

2019 年度から 2020 年度において以下のように認知特性に変化がみられた (表 1)。

表 1 類型化の変化

	2020年度の類型化	2019年度の類型化
01	ASDタイプ	PSI低群
02	ASDタイプ	知的BL群
03	PSI平均・流暢性高タイプ	PSI低群
04	ASDタイプ	PSI平均・流暢性高群
05	PSI平均・流暢性低タイプ	PSI平均・流暢性低群
06	PSI平均・流暢性高タイプ	PSI平均・流暢性高群

2. 認知特性の変化

ASSQ において, ASD タイプは 10 点以上の差, AD タイプには, 最大で 3 点の差がみられた。全ての事例において ASSQ 得点の増加がみられた。STRAW-R では, 流暢性に困難を抱える課題が増えた事例は, ID.01, ID.04 であった。その他の 4 名は, 流暢性に困難を抱える課題が減少した。

ウェクスラー式知能検査の下位検査評価得点より, 2019 年度と 2020 年度の項目ごとの差に注目した。ID.01 は, 「単語」と「積木模様」で 7 点差, ID.02 は, 「数唱」で 4 点差, ID.03 は「語音整列」で 6 点差, ID.04 は「単語」で 7 点差, ID.05 は「絵の抹消」で 8 点差, ID.06 は「類似」で 7 点差であった。変化する検査項目数や検査内容に個人差がみられたものの, すべての事例において, 4 点以上の差がみられた。認知特性のアン

バランスがみられ, 下位検査評価点プロフィールの形が異なることが分かった。以上より, ID.02 を認知特性が安定している事例, その他の 5 名を認知特性変動の大きい事例に分け, 認知特性の変動の背景要因について検討した。

V. 考察

1. 認知特性の変化について

ASD タイプ, AD タイプともに知能検査の下位検査プロフィールにかなり大きな変化が認められた。その変化には個別性が大きく, 共通する特徴はみられない。また, それに伴い ASSQ に表される行動特性や基礎的学習能力にも変化がみられたが, こちらも個別性が高いと思われる。

2. 認知特性と内的体験内容の変化について

認知特性の変容が安定している事例の特徴として, 病態水準の変化はみられなかった。ID.02 は, 2019 年度の類型化にて知的 BL タイプであった。元来, 知的に低い場合は経年変化に大きな変化がみられないのかもしれない。また, 人物画より自我肥大がみられ, 日常生活において自信を付けてきたと思われる。A 学園での適切な支援の下で安定した生活が送れていたために病態水準や認知特性の変化がみられなかったのかもしれない。認知特性の変容が大きい事例において, 大きく病態水準が下がった事例が多く, 水準が安定していた事例は, 一事例であった。水準が安定していた事例として, 同じ下位検査間でも大幅に上昇した項目と下降した項目とがあり, なぜこのような傾向がみられたかは不明である。また, 病態水準が下がった事例についても, 一貫した特徴はみられなかった。

認知特性の変化と関連して, 人物画とロ・テストの変化について検討したが, 因果関係では説明しにくく, 相互に関連しながら包括的な変化がみられたと考えられる。

VI. 本研究における今後の課題

認知特性の背景要因に課題を絞って検討を進めることである。今後も多くの事例と経年変化年数を重ねて検討していくことで, 不登校生徒への支援につながっていくであろう。